

1. 津山の弥生墓地

中山俊紀

a. はじめに

墓地には、その時代の社会環境が鋭敏に反映されることが多い。そのため、墓地から過去の社会を復元しようとする研究も多く、弥生墓地についても多数の研究が積み重ねられてきた。しかし、そこから得られた帰結をみると、様態は多様で、時には相反するものにも遭遇する。それぞれ基礎とする遺跡に地理的な違いがあるので、その相違は地域差と捉えられる場合もあるが、多くの場合は分析途上の主觀に左右された結果生じたのではないかと疑われる。

この種の議論には、分析方法のある種の客観化が必要と思うが、考古学的には先見的な手法の提示困難なのが現状といわざるを得ない。客観的な分析手法を手繕り寄せるには、分析の筋道を明らかにした研究を重ね、相互に批判を重ねていくしかないだろう。

そこで、津山の弥生墓地について既存の資料を整理し、そこから導き出せる一つのモデルを提示してみようと思う。地域の特質を議論するための、たたき台となれば幸いである。

b. 墓地の概要

すでに発掘調査された津山の弥生墓地には、三毛ヶ池遺跡^{註1}（河面）やアモウラ遺跡^{註2}（一宮）、竹ノ下遺跡^{註3}（沼）、才ノ峪遺跡^{註4}（樫）、權現山遺跡^{註5}（小原）、下道山遺跡^{註6}（総社）、上原遺跡^{註7}（下横野）、有本遺跡^{註8}（田邑）などがある。このうちもっとも古いものは、三毛ヶ池遺跡やアモウラ遺跡で中期中葉、それ以降各期のものがあって、上原遺跡などは後期後葉に属する。

集団墓地といった外観を呈するものが多く、土壙墓多数が集中して発見されるのが普通である。個々の埋葬施設としては、板材を組み合わせた棺が用いられていることが一般で、その場合、それらは棺を用いない土壙墓と区別して木棺墓ともよばれる。その他、壺・甕・高杯を利用した土器棺墓などもあるが、箱式石棺墓はほとんど例がない。もちろん、木棺墓といつても、棺材の残片を残すものがまれに発見されている以外、実物が遺存した例はない。腐食し、土に置き換わった棺痕跡等からその形が推測できるのみである。痕跡からの推定により、その木棺の形式には大きくわけて二種類あることが分かっている。一つは、小口板を墓穴の床に一段掘り窪めた穴に差し込み立てかけて、側板を組み合わせていく形式のもので、今一つは、あらかじめ箱形に組み立てられていたのではないかとみられるものである。古い墓地では前者が一般的で、後者は後期でも新しい時期の墓地に多くみられる。棺規模には大小幅があり、ごく小形の墓にも木棺が広く用いられたという特徴がある。たとえば竹ノ下遺跡では、大形に属するものは内法長1m70cm、幅約60cm、小形の木棺は、内法の長さ35cm、幅25cmで、その間に段階的に数種のものがあった。

いずれの墓地でも、人骨自体が発見されたことはないが、それが墓ではないという人はいない。一般に、小規模な木棺墓は乳幼児、中規模のものは小児、大形のものは成人埋葬に用いられたと考えられている。特殊な場合を除き、そう捉えておおむね問題はない。

これら弥生墓地を中・後期と分けて比較した場合、いくつかの相違点があげられる。立地という点でいうと、たとえば、竹ノ下遺跡やアモウラ遺跡、沼E遺跡などのように、中期墓地は集落の一角で発見される場合が多く、後期の下道山遺跡や權現山遺跡、上原遺跡などは、集落からかけ離れた丘陵上の瘦尾根に立地する、という傾向の違いが指摘できる。また、中期の墓地は小規模で埋葬数は少なく、後期

のものは大規模、という場合が多い。発見された埋葬数でいえば、竹ノ下遺跡（図2）で16あまり、アモウラ遺跡は約30である。ところが、後期の下道山遺跡（図4）では、調査範囲が墓地の一部であったにもかかわらず120余りの土壙墓が発見され、一帯に弥生墓の痕跡が点々と確認されているので、墓地全体でいえば数百の埋葬があったといつてもほぼ間違いはない。権現山遺跡は、調査当時には既に中心部が土取りにより大きく破壊されていて詳細不明であるが、断片的に残されていた情況からみれば下道山遺跡と似たものであつたらしく、あるいはい下道山遺跡と一連の墓地であった可能性もある。いずれにしろ、後期の墓地は継続的に営まれている場合が多く、結果として大規模になったという側面もある。少なくとも、特定の地が特定集団の葬られるべき地と意識され、連綿と利用されるようになつたという習俗変化のあったことは推定できる。

中・後期の差は、土器の発見されたにもまたよくあらわれている。中期の墓地では、土器類はまれにしか発見されず、発見されても日常土器と特に異なるということはない。しかし、後期の墓地では、集落遺跡のものとは異なり、装飾はなはだしい土器多数の発見される場合も多く、そこでとりおこなわれた葬儀痕跡濃厚、といった具合に変化している。そういう変化は、後期に死後世界が急速に構造化されていったとみれば理解できる。

同じころ、岡山県南部では特殊器台や特殊壺、とよばれる葬送祭祀専用土器が発達している。それらは呪的文様をまとった大形土器で、墓地に限定され発見されるという特徴をもっている。その変遷の研究から、それは亡き首長の靈威を受け継ぐ儀式に用いられた象徴的儀器であり、のちの埴輪の原型となつたものと説かれているが^{註9}、その特殊器台や特殊壺が上原遺跡や皿の丸山遺跡^{註10}、権現山遺跡、有本遺跡などといった後期後葉の津山の墓地からも点々と発見されている。その発見が象徴する外来の埋葬習俗は、津山の葬送祭祀にどのように取り入れられ、在来の習俗にどのような変化を引き起こしたのか、という興味ある課題を提示する。

C. 墓地の具体例

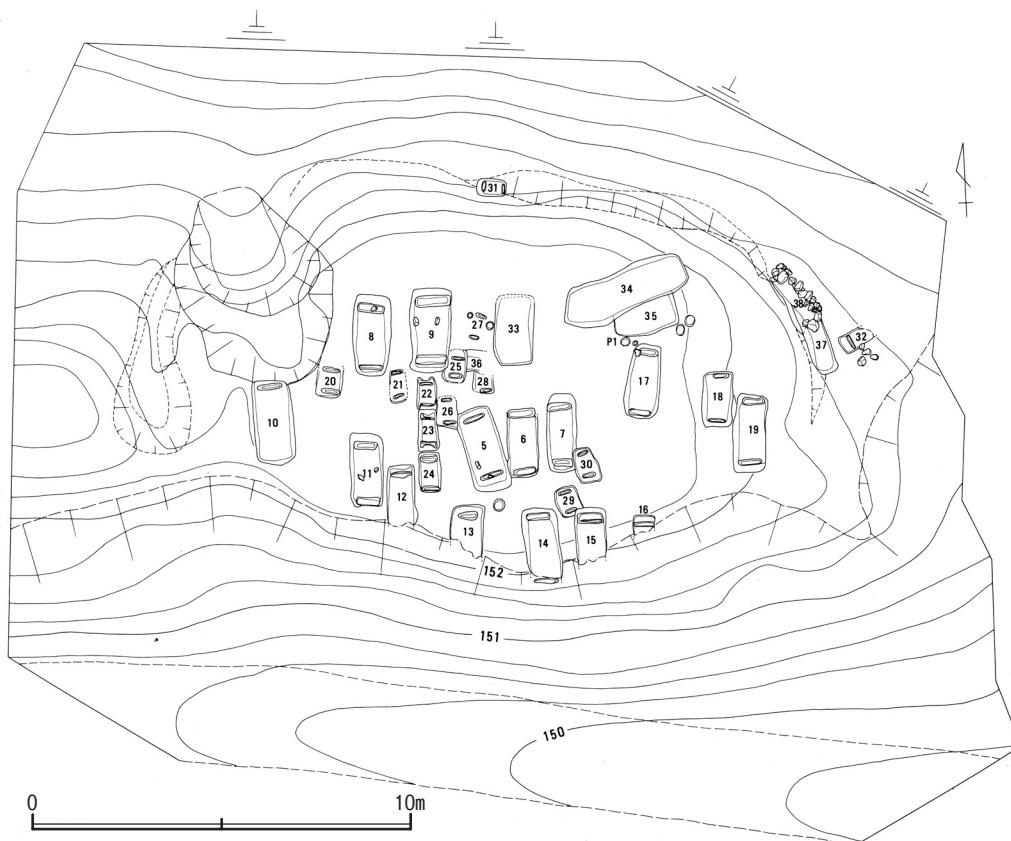
(1) 三毛ヶ池遺跡（河面、図1）

平成4年に、津山市教育委員会が土取工事に先立ち調査した低丘陵上の遺跡。長径15m、短径9mの長楕円形墳丘墓が発見された。その墳丘墓自体は中期中葉に造られ、後期に改変再利用された。個別埋葬は、ほぼそれぞれの時期に区別されたので、そのうち中期中葉の埋葬配置について検討しておきたい。

埋葬平面上で発見された墓数は27で、内訳は大形棺16、小形棺11である。小形棺の全体に占める割合は41%となる。この比率には、さらに土器棺1も乳幼児棺として加わる可能性がある。木棺の形式は、両短辺に小口穴をもつものが大多数を占める。小口穴をもたない不確かな大形棺一例が存在するが、これはその数字から除外する。それらのうち、5号埋葬からは石鏃3点が発見され、射殺された人物の墓などと調査中には想像された。各棺の主軸方向は、すべておおむね南北方向を向いており、人骨が遺存しないのではっきりしないが、埋葬頭位は北か南のどちらかに統一されていたか、その両者に限定されていたことが分かる。

各埋葬を、その空間配置から単位に分けると、大形棺は、5・6・7号埋葬…群A、10・11・12・13号埋葬…群B、14・15・16号埋葬…群C、17・18・19号埋葬…群D、8・9・(33)埋葬…群E、と5群に細分できるようにみえる。

小形棺は、21～28号埋葬…群F、20号埋葬…群G、29・30号埋葬…群Hと3群に分けられそうなので、そういう空間配置から、以下のような埋葬秩序が存在したのではないか、と推定できる。



※図中の34、35、36については、同時期の土壙墓の可能性もあるが、不明確なのでこれらについても除外した。

図1 三毛々池遺跡中期墳丘墓（縮尺1：200）

群Aは、埋葬平面の中央部に位置するので、この群を中心として、それをとりまくように群b～群eの埋葬群4単位が存在し、それぞれは3または4の大形棺で構成される。小形棺については、20や29・30のような少数の独立傾向をもつ一群と、特定箇所に集中する群の二類別、というものである。

ところで、三毛ヶ池遺跡は墳丘墓といふ「権威を誇示する墳墓形式」であるが、大形棺と小形棺の比率は3対2で、全体に占める小形棺の割合は、想定される当時の乳幼児死亡率とおおむね一致することから、「特定人物」の埋葬を目的とする墓地ではなかった、と推定できる。

(2) 竹ノ下遺跡（沼、図2）

昭和54年から55年にかけ、土地区画整理事業にともない京免遺跡と一括して津山市教育委員会が発掘調査した。河岸段丘上に存在する中期後葉から後期後葉にかけ営まれた集落遺跡で、その一角から、中期後葉の小規模な墓地が発見された。遺存状態はよくなかったが、14基の木棺墓が把握できた。内訳は大形棺9に対して小形棺5で、小形棺の占める割合は38%ということになる。木棺墓のうち大形の1棺のみ小口の穴がない形式で、その他はすべて小口穴を伴っていた。三毛ヶ池遺跡と異なり、竹ノ下遺跡の場合は、小形棺が分散傾向にある。三毛ヶ池遺跡を目安に各埋葬を群別すると、G5・G6・G8号埋葬…群A、G2・G3・G4号埋葬…群b、G14埋葬…群c、G11・G12・G13埋葬…群d・G7・G9・G10・G23埋葬…群eと、5群に分けることができる。群Aが木棺墓群の中央部に位置するので、それを中心と考えれば、中心と周辺4群という関係は、三毛ヶ池遺跡と同様に捉えることができる。各群の大形棺数は、群Aは3、群bが1、群c 2、群d 1、群e 2ということになる。木棺の主軸方向は、大きいくらい東西方向と南北方向の二種に大別される。大形棺の場合、東西方向7に対し南北方向が2で、小形棺の場合、前者が2、後者が3という構成になっている。

(3) 下道山遺跡 (総社、図3, 4)

昭和51年に、果樹園造成に先立ち、下道山遺跡緊急発掘調査委員会（主として岡山県教育委員会が担当）が発掘調査を実施した。丘陵尾根筋に立地する遺跡である。遺跡の一部の調査にかかわらず、その調査により、後期前葉の方形と長方形区画をもつ台状墓各1基、及び120基あまりの土壙墓群が発見された。以下、台状墓と土壙墓群に分けて、概要を説明したい。

(a) 台状墓 (図3)

1号台状墓は遺存状況が悪かったが、約9m四方の区画をもつ墓と推定され、その中央部に小口穴をもつ大形の木棺墓2が発見された。埋葬相互の位置関係は、整然というわけではないが、いずれも主軸を南北方向に向か、おおむね並列の状態で発見されたといえる。

2号台状墓は1号台状墓の西に隣接し、その西端は調査区外に延び調査が及ばず、全形は不明である。短辺約9m、長辺14m以上の長方形区画墓とはいえる。すべての埋葬は、台状墓の

長軸中央線に直交し並列していた。発見された合計8埋葬のすべては大形棺に限られ、棺形式も小口穴をもつ同種のものばかりであった。そのすべてを一群と捉えることもできるが、しいて群分けを考えるとすれば、並列の途切れを境に、東3棺と中央部5棺以上の2群に分けることができる。1号・2号台状墓とも大形棺のみで構成され、被葬者が成人に限られること、同種原理による一連の埋葬に限定されているとみられる点で、特定人物の埋葬に限定された墓地区画ということができよう。

(b) 土壙墓群 (図4)

一号台状墓より約30m東南に位置する土壙墓群は、おおむね30m四方の範囲を占める。その範囲で120余り確認された弥生墓はほとんどが木棺痕跡を残し、大形土壙墓66、小形土壙墓55で構成されている。小形棺の占める割合は45%で、その構成比は弥生墓地一般の傾向とおおむね一致する。棺同士重なり合う様子はほとんどみられないが、全体として各墓の主軸方向はまちまちである。出土土器の様相からみると、墓地の継続時間が比較的長かった可能性がある。大きくみれば3ないし4単位の墓地企画が存在したようにもみえるが、空間分布から個別の様相を識別することははなはだ困難である。その原因としては、継続時間幅が長かったこと、傾斜地に位置し地形の制約を大きく受けたこと、またすで

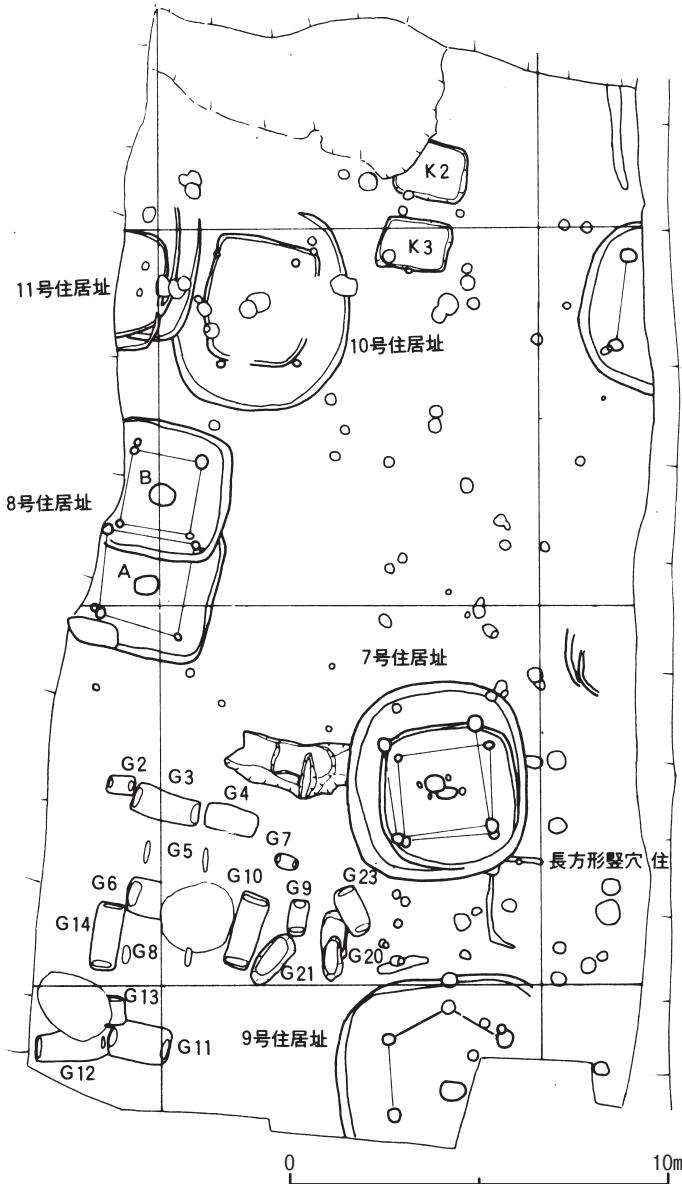


図2 竹ノ下遺跡 (縮尺 1 : 200)

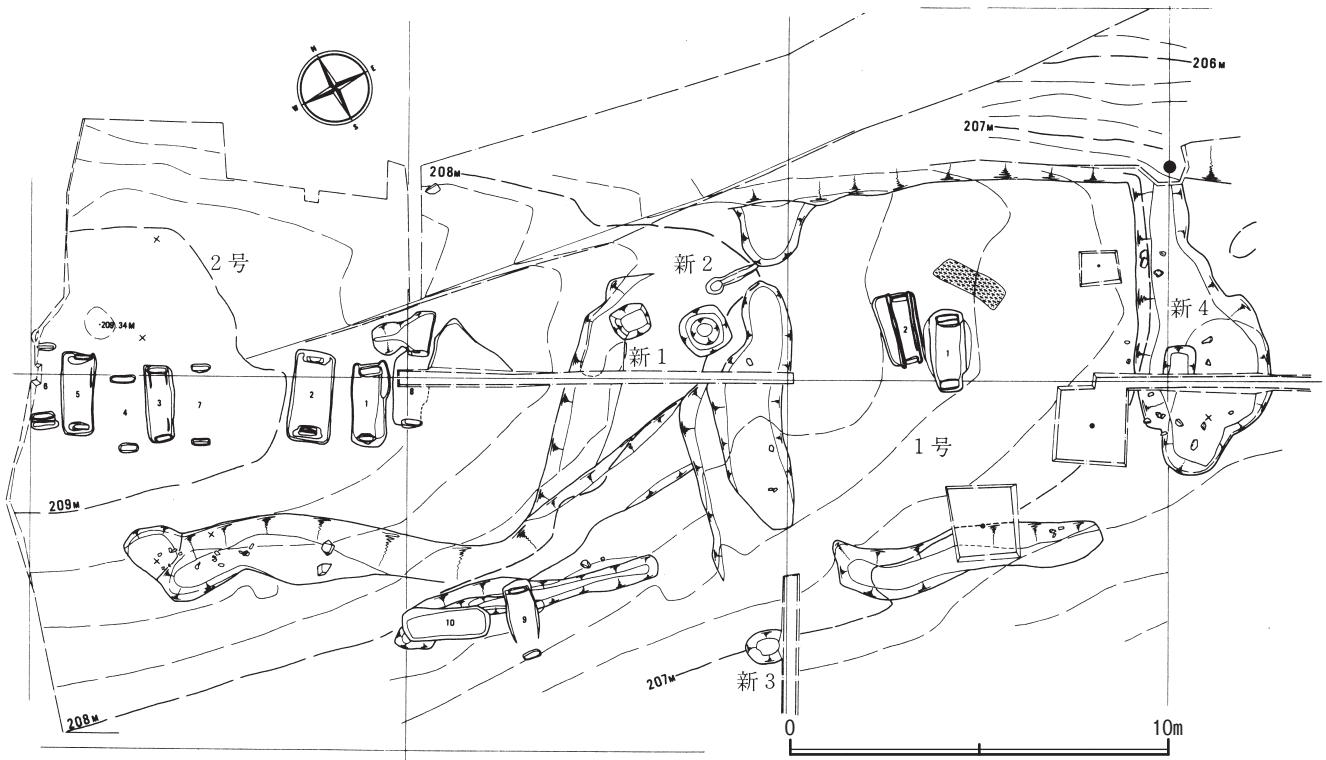


図3 下道山遺跡方形台状墓群（縮尺1：200）

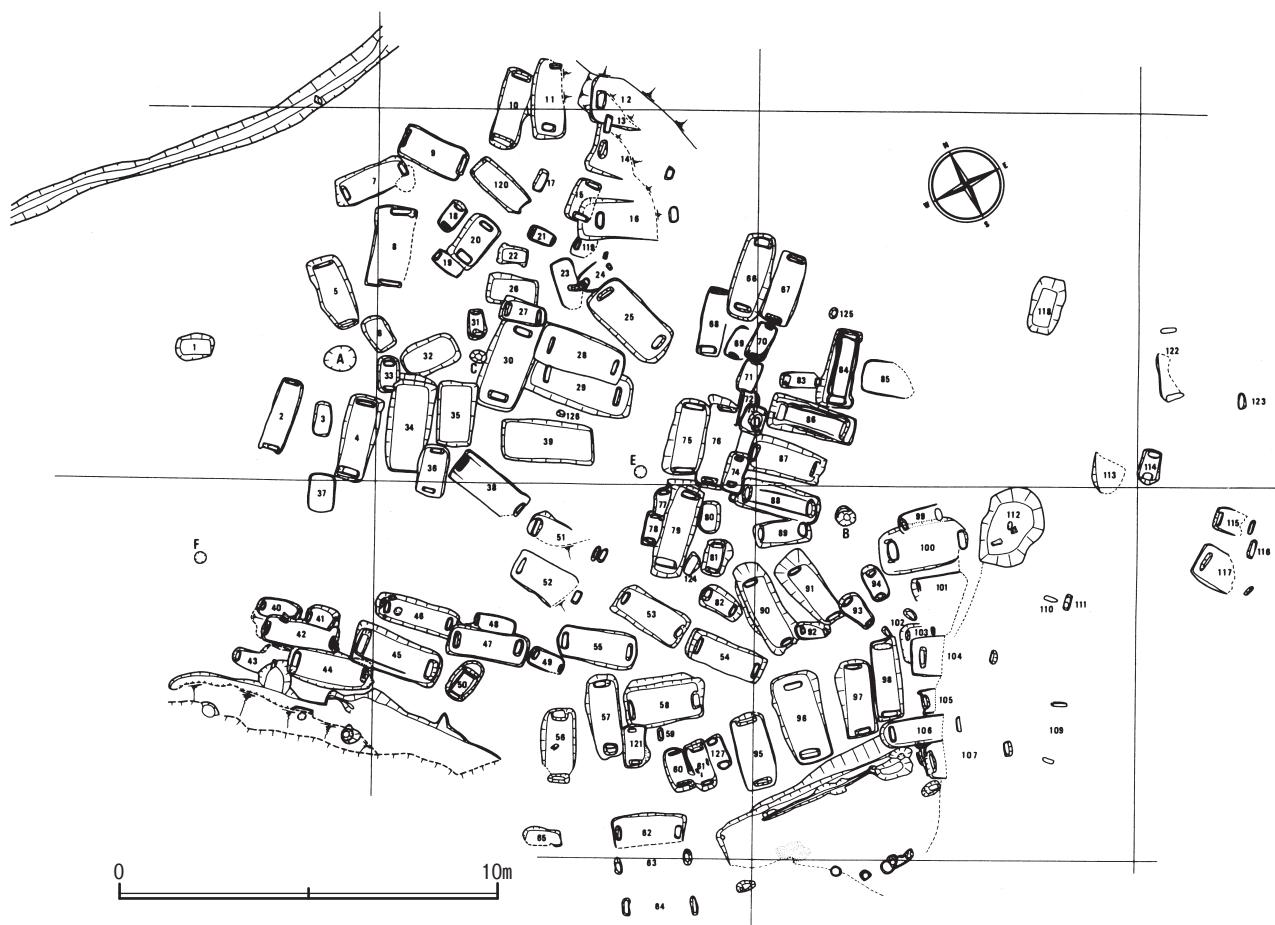


図4 下道山遺跡土壙墓群（縮尺1：200）

に消失した多数の墓があるためかとみられる。

そう理解した上で、埋葬秩序を読み解く手がかりを探れば、まず、小形棺が特定部分に集中する点が挙げられる。次に、乱雑に分布しているようにみえる大形棺も、主軸をあわせ並列する単位が随所にみられこと、などがある。小形棺の配列や大形棺の並列単位から、それらを部分要素とみなし、断片をつなぎ合わせていけば、墓群の東部と南部では不規則とはいえ、一定の区画が想定されることはない。強引に読み解けば、三毛ヶ池遺跡や竹ノ下遺跡の場合と同様、それぞれに中央と周辺4群という秩序を想定することもあながち不可能ではない。

(4) 才ノ峪遺跡（楕、図5）

昭和59年、ゴルフ練習場造成のため津山市教育委員会が事前調査した丘陵上の遺跡で、弥生後期前葉の長方形墳丘墓が発見された。その埋葬平坦面は、短辺約9m、長辺約15mであった。そこで発見された埋葬数は少なく、大形木棺墓6と不確実な小形木棺墓1のみであった。小形棺が例外的に1存在するとしても、ほぼすべてが大形棺で構成されるという点は、下道山遺跡台状墓の棺構成に似る。下道山遺跡台状墓と異なるのは、各木棺が分散的に配置され、主軸方向が東西と南北の二種に分かれることである。全体埋葬数が少ないと見え、その各棺の位置、主軸方向を手がかりとすれば、ある種の埋葬企画を推定することも可能である。

たとえば、中央に存在する6号棺を中心と仮定すれば、三毛ヶ池遺跡と同様に、(5号)、6号・群A、2、3号・群b、7、8号・群c、群dに相当する位置には埋葬がなく、1号・群eというぐあいに、中心と周辺4単位で構成されていた、と捉えることも可能である。埋葬施設が、大形棺に限定される点で下道山遺跡台状墓の特徴に一致し、特定人物埋葬のための墓地と考えられるが、埋葬単位間に主軸方向の相違がみられるので、下道山遺跡台状墓とはまた異なる埋葬秩序の存在していたことが推測できる。各埋葬単位が少数で、分散配置していることからみれば、墳丘築造当初から中心と周辺4群という規範が存在したのではないかと考えられる。

発見された土器は少ないが、S字スタンプ文などで装飾された墓地特有の器台型土器や、装飾要素の強い高杯形土器の破片が発見されている。

(5) 上原遺跡（山方、図6）

昭和41年と42年に、岡山大学が学術調査した後期後葉の墓地遺跡である。南面する丘陵突端の約15m×9mの範囲に集中して木棺墓が発見され、その周辺を含め、総計40前後の埋葬があったと報告されている。公表された全体図から、大形のもの25、小形のもの14の存在が数えられ、小形棺の割合は38%となる。そこでは、小形棺の分布に特に集中するという様子は窺えない。

埋葬方向には、直交する二種がある。大形棺の並存状況やその方向に着目して埋葬単位を想定すると、中央部に東西方向の大形2棺が並存し、北西部に南北方向の1単位、南西部に南北方向の1単位、南東部に南北方向の1単位、北東部に東西方向の1単位がある、と概括できる。中央1単位、周辺4単位という関係は、上原遺跡ではきわめて明快に把握できるといえよう。

ところで、中央に存在する大形2棺と周辺単位の棺方向に着目すると、中央2棺と方向を同じくするのは北東部1単位のみということになり、他単位は原則として中央群に直交する関係にあるといえる。また、中央単位に接し同方向の小形棺2棺があって、周辺単位を分割するように埋葬されているので、その2棺も中央単位と一連の埋葬とみてよさそうである。

さて、上原遺跡では、特殊器台や特殊壺の破片が数多く発見されている。それらは、首長靈繼承儀礼

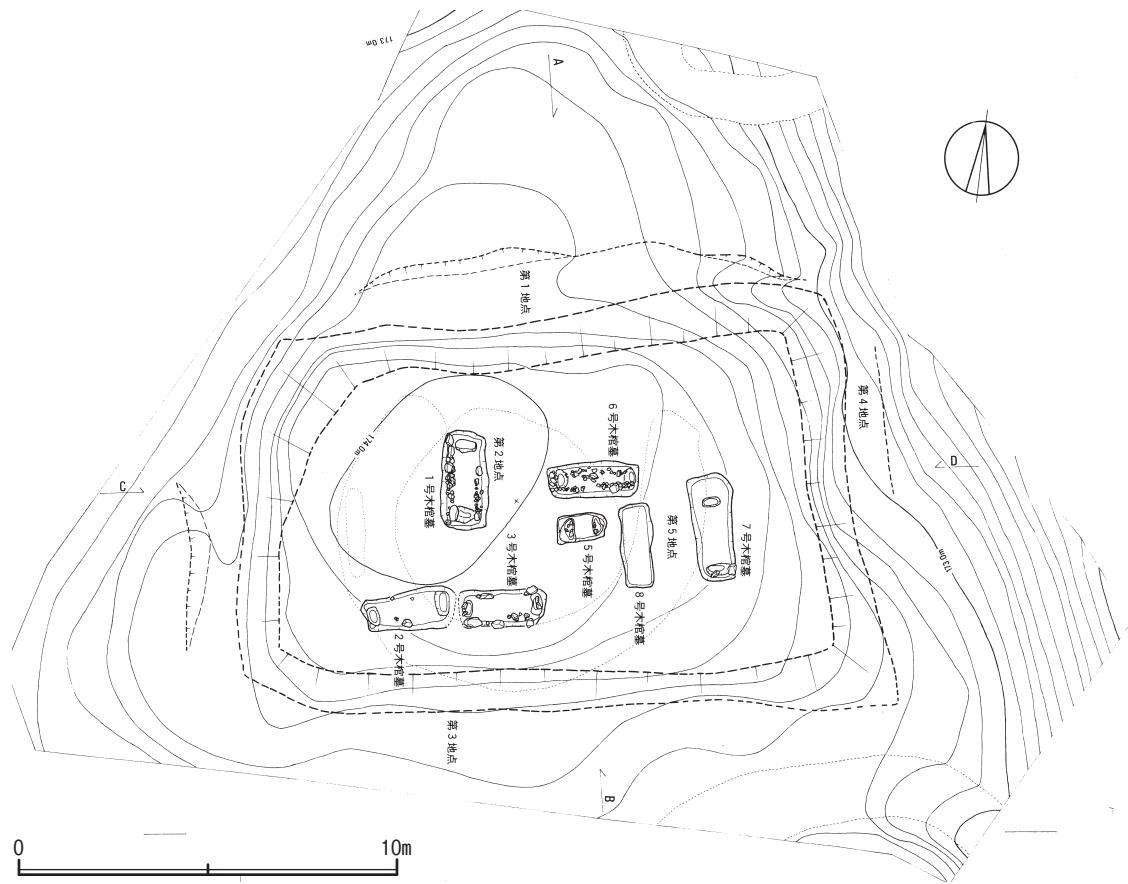


図5 才ノ峪遺跡（縮尺1：200）

に用いられる儀器とされるので、そうであれば、この上原の墓地はすくなくとも、族長を含む集団の墓地であった、と考えても差し支えない。

(6) 権現山遺跡A地区（小原、図7）

同じく特殊器台や特殊壺の発見された墓地に、権現山遺跡がある。権現山遺跡A地区は、下道山遺跡の東約250mの痩せ尾根に位置し、昭和51年に墓地造成に先立ち、津山市教育委員会が発掘調査を実施した。後期後葉の、比較的限られた時期の墓地遺跡で、調査面積も約150m²と、小規模なものであった。

発見された埋葬数は、局部のみ分かっただけのものを含めると、33ある。内訳は、木棺墓が30、土器棺2、箱式石棺の可能性のあるもの1である。木棺墓に限ると、大形棺は16、小形棺は14で、小形棺の全

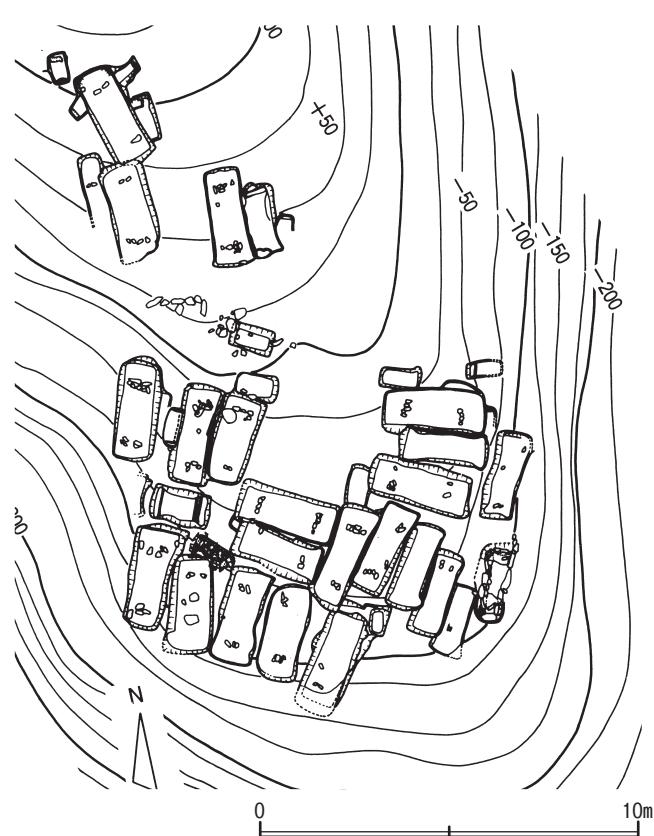


図6 上原遺跡（縮尺1：200）

体に占める割合は47%と高い。棺主軸方向は、おおむね東西方向のものと南北方向のものの二種に分かれる。

木棺形式の判明するものは、(I)床面に小口板を埋め込む棺形式のもの6埋葬。(II)床面に小口や側板を埋め込む溝をもたない棺形式のもの17埋葬。(III)床面に小口や側板を埋め込む溝をもた

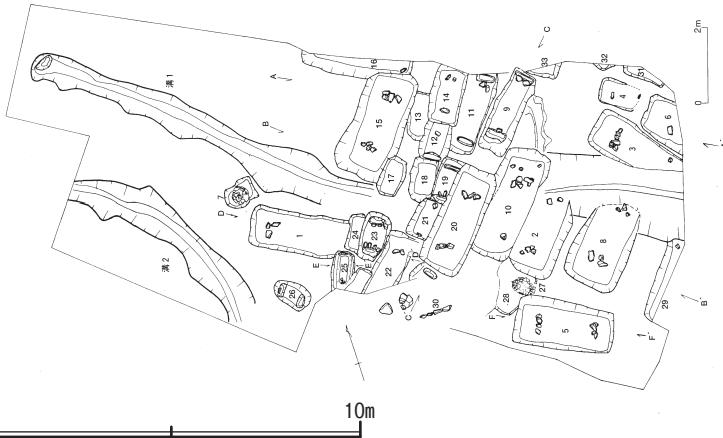


図7 権現山遺跡A地区(縮尺1:200)

ない棺形式ではあるが、埋葬部分の床がU字状にさらに一段窪むもの1埋葬、の三種にわかれ。しかし(III)は、類似例が発見されておらず、棺形式はおおむね小口穴を持つものと、小口穴をもたず床面平らな構造の2つに分かれるといえる。いずれの構造の木棺墓も、床面に石材が残される点は共通で、その種の石材は枕石と呼ばれることも多いが、普通両小口に対称的に存在し、棺の底板安定材として用いられたものではないかと考えられる。

各棺の空間分布に目をやると、小形棺の多くが北西部に偏在し、なおかつ直列して小形棺帯ともいべき帯を形成していることが分かる。これとは別に、独立的傾向をもつ4や26の小形棺2棺もあって、それらはともに小形棺帯と主軸方向が直交する。

大形棺の分布でまず目をひくのは、調査区南東の中央に、北西から南東にかけ大形棺が並列して伸び広がる状態であろう(20、10、2、8、やや離れて29、逆に小形棺帯を挟んで15の計6棺)。これら大形棺の主軸方位は小形棺帯とも一致するので、墓地の区画があったとして、その辺方向を指し示すと考へてもよいだろう。うち、20、16、2、8埋葬の一群は、一連の埋葬単位と想定することが可能である。それらに直交する大形棺には、1、16、5、3、6の5埋葬があって、小形棺帯を挟んで北東に2棺、南西に3棺存在する。

ところで、権現山遺跡A地区の場合、調査範囲は墓地の一角に限定されるので、上記のように部分的に並列単位が想定されても、それが墓地全体の中でどのような位置を占めるのかははっきりしない。その点が確定できなければ、全体企画については云々できない。その手段として、上原遺跡の棺配置と比較することは、大変意味があることのように思われる。なによりも、上原遺跡と権現山遺跡A地区とはともに同時期の墓地で、またいざれからも類似様式の特殊器台や特殊壺が発見されるなど、墓地としての性格もきわめて類似するからである。

比較してみよう。上原遺跡の埋葬単位を中央1単位、周辺4単位とみた場合、中心の大形棺と周辺単位で棺方向を同じくするのは北東部の一単位のみで、その他の単位は、原則として棺方向が中央単位に直交している。仮に、この関係が権現山遺跡A地区でも成り立つとして、3、6の棺を中心と仮定すれば、権現山遺跡A地区の20、10、2、8の並列棺は、上原遺跡の南西部の一群にのみ対応するという関係になる。この仮定が成立しうるかどうかは、権現山遺跡A地区の3、6の棺が中央棺に相当するかどうか、という点にかかっているといえよう。

ところで、上原遺跡の中央部には、大形の2棺と一連とみられる小形の2棺があった。権現山遺跡A

地区の場合も、中央棺と仮定した3、6と一群となった小形棺4の存在がある。唯一の副葬品「鉄剣」が発見されたのは、その小形棺4からであって、その「鉄剣」の副葬という事実からみれば、その小形棺に葬られた人物が、乳幼児であるにかかわらず被葬者の中で何がしか特別な存在であったとみなければならぬだろう。そう考えてよいのであれば、3、4、6の棺はまさに権現山遺跡A地区の中心棺群であって、20、10、2、8の並列棺は、上原遺跡の南西部の一群に対応する、という関係になる。また、その事実は、常識どおり中央の埋葬が墓地の中心埋葬であるということを裏付けるものもある。

d. 概括

(1) 墓地区画

これらの弥生墓地が、どのような集団の、どのような社会組織を反映しているのか、と考える場合、その前提になるのは墓地単位の把握であろう。幸いなことに、cで見たなかに、明確な墓地区画の残されていた遺跡が二つあった。一つは三毛ヶ池遺跡で、今一つは才ノ峪遺跡である。いずれも長方形の墳丘墓で、埋葬平面そのものがほぼ完全な形で残っていた。埋葬構成を問題にしようという場合、その考察の基本となるのは、墳丘の規模ではなく一連の埋葬平面なので、才ノ峪遺跡と三毛ヶ池遺跡について、そのそれぞれの埋葬平面を計測すると、いずれも長辺約15m、短辺約9mという数字が得られる。

この2遺跡以外にも、下道山遺跡では方形区画とみられる周溝が発見されていて、その埋葬平面を推定すると、ほぼ9m四方となる。この3墓以外で区画そのものを特定できるものはないが、上原遺跡は丘陵端に木棺墓が密集し、一連の木棺墓群は長辺約12m、短辺約9mの区画を想定すると、きれいにそのなかに納まるように見える。

その他の遺跡は、全体の遺存度がわるかったり、部分調査であったりといった理由で、区画の存在がはっきりしない。しかしいずれの場合も、長辺9~15m、短辺9m前後という基本規模を想定すると納まりのいいものが非常に多い。そういう状況からみれば、どの墓地もその程度の広さを墓地の基本企画としてもっていたと仮定しても、それほど現実と乖離しないといえよう。

(2) 乳幼児棺

(1)で想定した形態及び規模が墓地の基本企画であるとして、次に、それら墓地で特徴の一つとなっている小形棺を探り上げ、検討してみよう。まず、小形棺に着目して弥生墓地を概観すると、小形棺多数が発見される墓地(A)と、小形棺が原則として含まれない墓地(B)に二分されるように見える。前者の例としては三毛ヶ池遺跡、下道山遺跡集団墓群、権現山遺跡A地区などがあり、後者には下道山遺跡台状墓と才ノ峪遺跡がある。また、墓地(A)についていえば、それは単に小形棺を含むというのみではなく、埋葬全体に対する小形棺の占有割合は40%前後と安定している。当時の乳幼児死亡率はその程度であったとみなされているので、埋葬全体はおおむね死亡年齢比をそのままを反映していると考えてもよいだろう。そうしてみると、墓地(A)は、特定集団の所属者全員を葬るべき性格のものであった可能性がきわめて高いといえる。

ところで、三毛ヶ池遺跡や下道山遺跡の集団墓群及び権現山遺跡A地区の小形棺の空間分布をみると、特定部分に集中したり、直列して延び広がったりという傾向顕著で、そのことから、少なくとも小形棺、すなわち乳幼児が死亡した場合は、原則として墓地のなかの一定場所に埋葬されるべし、という集団理念のあったことが分かる。その理念の存在はまた、一見無秩序に埋葬を積み重ねていったようにもみえる集団墓地にも、全体としての埋葬規範が存在していたことを推測させる。

(3) 基本秩序

大形棺の配置からみると、その規範はどのように捉えられるだろうか。すでにみたように、その並列関係に着目した場合、埋葬単位が中央1単位と周辺4単位に分かれそうな遺跡が多かった。また、権現山遺跡A地区では、その中央単位に属するとみられる小形棺から鉄製「短剣」が発見され、中央単位が墓地の中心に相応しいことも推測できた。

墓穴の主軸方向という点からみれば、三毛ヶ池遺跡のようにすべて南北方向に限られる遺跡がある一方、主軸が交差する二方向の存在する遺跡も多い。後者に属する上原遺跡や権現山遺跡A地区では、中央棺群と棺主軸方向を一致させるのは、周辺埋葬群のうちの一単位のみという関係にあった。全体が分かる上原遺跡を例にとれば、周辺埋葬の大多数は中心埋葬群と交差の関係にあり、その比率は15に対し3となっている。

e. 概括から想起できる墓群の構造

(1) 中心棺群

概括から、津山の弥生墓地の基本単位とその規模、基本的な埋葬秩序の様態が推定できた。長方形を呈する基本墓域のなかで捉えられる類別単位は、成人棺では中心単位と周辺4単位併せて5単位で構成されると推測できた。したがって、その墓地運営集団の性格特定のためには、中心を構成する被葬者間の相互関係を特定することが中心命題となる。しかし津山盆地の墓地で人骨が遺存した例は皆無で、副葬品もまた残されるものがほとんどないことから、被葬者の性別や社会的位置を推し量ることはあまりにも困難、というのが現実である。

一点明確なことはといえば、中心が単体あるいは一対である、という規則性は認められず、3棺以上の並列する場合が多い、という事実である。たとえば、三毛ヶ池遺跡では3、沼竹ノ下遺跡3、下道山遺跡の方形台状墓では2と5以上、下道山遺跡の土壙墓群では中心と特定できないまでも3ないし4の並列単位が目にとまる。墓地遺跡全体としてみれば、中心棺群の並列構成数はランダムで、その棺形態に差異もなく相互関係は同質と考えざるを得ない。中心棺群は、その被葬者集団の中核的位置に存在した人々と考えられるので、その相互関係は兄弟（姉妹）の関係とみるのが、もっともふさわしいといえよう。

ところで、上原遺跡の大形棺は一対、権現山遺跡もそれが一対という可能性は強いので、それについては一言付け加えておこう。いずれも小形棺がともない、小児棺を含めた中心棺群は「夫婦及びその子供」を示していると受け取られやすいからである。しかし、そう仮定した場合、上原遺跡では中央の二棺が先行して埋葬され、小形棺が追加埋葬されたと相互の位置関係から推定できるので、改葬を考えない場合親子とみると極めて不自然な死亡順位を想定せざるを得ない。大形棺のみをとりだして対の関係を主張できるといつても、その大形棺と小形棺の関係が親子関係を示すものでないとすれば、それもやはり兄弟（姉妹）関係ではないか、と想定するのがふさわしいだろう。

(2) 周辺棺群

そうすると、中心単位と周辺単位の関係は、どのように捉えればよいのだろうか。上原遺跡の場合、周辺単位全体の4分の3が中心埋葬群と棺方向が交差の関係にある。埋葬方向に特定の意味があるとした場合、中心単位と周辺単位の大多数とに埋葬規範が相違していたことになる。周辺単位埋葬群のうち4分の3を占めるは被葬者群が、埋葬集団全体の多数派であることに疑いはない。その多数派と中心被葬者が集団を異にすることはありえないで、埋葬方向の差は出自の相違ではないといえる。比率からいっても性差という可能性もない。一般的に津山盆地の墓地遺跡では、小形棺が特定位置に集中する傾

向があるところからみて、もっともありうるべきその類別は、世代差ということになるのではなかろうか。

そうすると、もし中央棺群の伴侶が同一墓地に葬られていたとすれば、中央棺群と同一方向の周辺単位ということになるが、出自を異にする人物が同一墓地に葬られていたのかどうかということについては、疑問が残る。

(3) 想定される集団構造

こういった埋葬秩序に対応し想定できる集団構造は、兄弟関係に基づく大家族制や、血縁組織にもとづく氏族制ということになろう。

註

- 1 「三毛ヶ池遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第48集 津山市教育委員会、1993
- 2 津山市一宮に所在する遺跡、アモウラ遺跡発掘調査委員会が1981年度に調査。弥生時代中期中葉から後葉にかけての集落で、一角に同時期の墓地が存在した。調査報告書は未刊
- 3 「京免・竹ノ下遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集 津山市教育委員会、1982
- 4 「才ノ峪遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第18集 津山市教育委員会 1985
- 5 河本清、中山俊紀「権現山遺跡A地区」年報『津山弥生の里』第10集 津山市教育委員会 2003
- 6 御船恭平「美作における弥生時代の墳墓について」『古代学研究21・22合併号』 1976
「下道山遺跡緊急発掘調査概報」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告17 岡山県教育委員会 1977
- 7 近藤義郎・春成秀爾、「岡山県津山市上原遺跡」『日本考古学年報19』 1966
近藤義郎、「上原遺跡」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県史編纂委員会 1986 山陽新聞社
- 8 「有本遺跡、男戸嶋古墳、上遠戸嶋遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第62集 津山市教育委員会 1998
- 9 近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻第3号 考古学研究会 1967
- 10 河本清、「津山市丸山遺跡発見の遺物」『津山市文化財年報I』津山市教育委員会 1975

図出展

- 図1 「三毛ヶ池遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第48集 津山市教育委員会、1993
図2 「京免・竹ノ下遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集 津山市教育委員会、1982
図3・4 「下道山遺跡緊急発掘調査概報」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告17 岡山県教育委員会 1977
図5 「才ノ峪遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第18集 津山市教育委員会 1985
図6 近藤義郎、「上原遺跡」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県史編纂委員会 1986 山陽新聞社
図7 河本清、中山俊紀「権現山遺跡A地区」年報『津山弥生の里』第10集 津山市教育委員会 2003